

星の世界から

小川未明

青空文庫

良吉は貧しい家に生まれました。その村は寂しい、森のたくさんある村でありました。小鳥がきてさえずります。また春になると、白い花や、香りの高い、いろいろの花が咲きました。

良吉には仲のいい文雄という同じ年ごろの友だちがありました。二人はいつもいっしょに棒を持ったり、駆けつこをしたり、また、さおを持って河にいったりして、仲よく遊びました。

村はずれには河が流れていました。その水はたくさんできれいでありました。河のほとりには草が茂っていました。二人はその草の上に腰を下ろして、水を見つめながら釣りをいたしました。

また風の吹く日には、いっしょにくりの実を拾って歩きました。また枯れ枝などを拾ってきて、親の手助けなどをいたしましたこともありました。こうして二人は、なんでも持っているものは、たがいに貸し合って仲よく遊びました。たまに両親が町へ行って買って

きてくれた絵草紙や、おもちゃなどがあると、それを良吉は文雄にも見せてやったり、貸してやったりいたしました。また、文雄も同じことで、なにか珍しいものが手に入ると、きつとそれを良吉のところへ持つてきて見せました。二人の間では、なんでも差別なくして仲よく遊びました。だから、その村は町から遠くはなれていて、さびしい村でありましたけれど、二人はけつしてさびしいとは思いませんでした。二人はいつも、楽しく仲よくして遊んでいました。

しかし、不幸というものは、いつ人間の身の上にやってくるものだからわかりません。あの寒い、もう秋も老けてゆくころでありました。文雄は、ふとしたかぜをひきました。そして、それがだんだん重くなつて床につきました。良吉は心配して、毎日のように文雄の家へいつては、病気をみました。文雄の両親もいつしうけんめいで看病いたしました。けれど、ついに文雄はなおりませんでした。枕もとにすわつて、心配そうに自分の顔を見つめている、友だちの良吉をじつと見て、「早くなおつて、また君といっしょに遊ぼうね。」

と、文雄はやつれた姿になりながら、にっこりと笑つていいました。

「ああ、遊ぼうよ、君、気分はちつとはいいかい。」

と、良吉は笑顔になつて、そのやせた哀れな友だちの手を握りました。しかし、これが別れでありました。とうとう文雄はその晩死んでしまいました。

二

良吉は悲しさのあまり泣きあかしました。文雄は村のお寺の墓地に葬られました。良吉は文雄のお葬式の時にも泣いてついでゆきました。それからというもの、彼は毎日のように暇さえあればお寺の墓地へ行って、文雄の墓の前にすわつて、ちようど生きている友だちに向かつて話すと同じように語りました。

「君、さびしいだろうと思つて僕は遊びにきたよ。」

と、良吉はいいました。木枯らしは、そのさびしいほかにはだれも人影のいない墓地に吹きすさんで、枯れた葉が、空や、地の上にわびしくまわっていました。そして、しばらくそこに良吉はいますと、やがて日がうす暗くなります。すると彼は名残惜しうに帰つてゆくのでありました。

けれど、良吉の一家は事情があつて、その明るる年にこの村からほかの村へ移ら

なければならなくなりました。良吉はまたしばらく文雄のお墓にもおまいりができなくなると思つて、ある日のことお墓へおまいりに参りました。そして、そのわけをいつてから、彼は名残惜しそうにこの村を離れたのであります。

今度、良吉の一家の越してきたところは、ある金持ちの家の隣でありました。その金持ちの家にも、ちようど良吉と同じ年ごろの力蔵という子供がありました。そして、二人はじきに友だちとなりました。

力蔵はほしいものは、なんでも買つてもらいました。流行のおもちやも、きれいな本も、いろいろのものを持つていました。そして、それらのものを家の外に持つてきては、同じ年ごろの友だちにみせました。良吉にはまだはじめて見るような、名も知らない珍しいおもちやがありました。けれど力蔵はだれにもそれを貸してくれませぬ。たとえ貸してくれても、すぐにそれを取つてしまいました。

良吉も心の中で、自分もあんなおもちやがほしいものだと思ひました。彼は飛行機や、モーターボートや、オルゴールや、空気銃などは一つも持つてみたことがありません。どれでも力蔵が持つているようなおもちやの一つでも自分が持つことができたら、自分はどんなにうれしいかしれないと思ひました。

力蔵りきぞうが持つもている、いろいろなおもちゃの中なかでも、彼のかれいちばんほしいと思おもつたものは飛行機ひこうきと、オルゴールでありました。そのオルゴールは、なんともいえないいい音色ねいろがするのであります。

「力蔵りきぞうさん、私わたしにすこしその鳴なるおもちゃを貸かしてくれない？」

と、良りょうきち吉きちはある日ひ、外そとで力蔵りきぞうがオルゴールを鳴ならしているそばへいつて頼たのみました。すると、力蔵りきぞうは頭あたまを左右さゆうに振ふつて、

「いやだ。これを貸かすと、君きみはすぐに、壊こわしてしまうもの。」

といいました。

「大事だいじにして持つもているから、ちつとばかり貸かしてくれない？」

と、良りょうきち吉きちは目めに涙なみだをたたえて頼たのみました。

「僕ぼくは、人ひとに貸かすのはいやだ。」

といて、力蔵りきぞうは貸かしてくれませんでした。

良 吉はしかたがないから、林の中に入って竹を切ってきて、自分でそれに小さな穴をあけて笛を造って吹いていました。すると、四方から小鳥がそれを聞きつけ集まってきて、近間の木の枝に止まってその笛を自分らの友だちだと思つていつしよになつてさえずつていました。この有り様を見ると力蔵はすぐに良 吉の持つてゐる笛が欲しくなりました。

「君にオルゴールを貸してあげるから、その笛を僕にくれないか。」
と、今度力蔵は良 吉に向かつて頼みました。良 吉は快く承諾して、その笛を力蔵に与えました。そして、自分をはじめてオルゴールを手を持つてきて大事そうにして、この不思議な音色のする機械をながめていました。すると力蔵はすこしばかりたつと彼のそばにやつてきて、

「僕はもう家へ帰るんだから、オルゴールを返しておくれ。」

といつて、良 吉からそれを取り返して持つてゆきました。その後で、良 吉はさも名残惜しそうにして、力蔵の後ろ姿を見送つていました。

良 吉の住んでいる家はあばら屋でありました。そして、良 吉は床の中に入つてから、昼間見たオルゴールや、飛行機のことなどが心の目からとれないで、それを思い出

して天じようを仰いでいますと、窓から、はるか高い青空に輝いている星の光がもれてきて、ちようど良吉の顔の上を照らしているのでありました。

その星の光はなんともいえない美しい光を放っていました。金色のもあれば、銀色のもある。また緑色のもあれば、紫色のも、青色のもありました。良吉は、自分はなんのおもちやも、また珍しいものも持たないけれど、この空の星だけは自分のものにきめておこうと思いました。そして毎晩、あの星の光をみつめて寝ようと思いました。

良吉は、毎晩、寢床の中に入ると、窓からもれる星の光を見ていろいろのことを考えていました。——すると、ある晩のこと、不思議にも窓から、彼を手招ぐものがあります。良吉は起きていつてみますと、それは文雄でありました。良吉はあまりのなつかしさに文雄の手を堅く握りしめました。

「僕はあの星の世界へいつているんだよ、星の世界にはもつと速い、いい飛行機もあれば、もつといい音色のする楽器もあるよ。今度くるときに僕は持つてきて君にあげるよ。僕は、いまその飛行機に乗つてきたのだ。これから僕は毎晩、ここへたずねてくるよ。だから君はもうさびしからなくていいよ。」

と、文雄ふみおはいいました。

「ああ、ほんとうに君きみは毎晩まいばん遊びあそびにきておくれよ。僕ぼくはさびしくてたまらないのだから。」

と、良吉りようきちは目めから熱い涙あつなみだを流ながして、友ともの手てにすぎりました。しかし友ともの手ては氷こおりのように冷つめたかったのです。そして、顔かおの色いろは、ろうのようにすぎとおって見みえました。良吉りようきちは変わり果はてた友ともの姿すがたが悲かなしくて、また泣ないたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「少年倶楽部」

1917（大正6）年9月

※表題は底本では、「星《ほし》の世界《せかい》から」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

星の世界から

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>